

# 小京都の魅力に関する観光客と市民の意識実態\*

The consciousness for little Kyoto's charm of tourists and citizens

和田章仁\*\*

By Akihito WADA

## 1. はじめに

地方都市の中で、それぞれの風土に培われた歴史を積み重ね、独自の文化を育んできた歴史都市を小京都と呼んでいる。しかし、小京都の呼称の起源は定かではなく、歴史的にも不明確である。それらが明確な形で現出したのは、昭和60年に全国の小京都を名乗る市町はじめ京都ゆかりの都市と京都市の26都市が手を結ぶことにより、「全国京都会議」が組織されてからである。

一方、小京都の魅力とは、周囲を山で囲まれ市中を清流が流れる山紫水明の地であり、歴史を重ねて佇む史跡や町並みを有していることであろう。しかしながら、小京都と呼ばれる都市が保持しているこれら自然景観や、史跡・町並みといった人為的な景観の具体的な姿は明らかではない。

そこで、本研究では岐阜県高山市と福井県大野市において、観光客と市民へのアンケート調査を実施すると共に、景観行政担当課に対するヒアリング等を通して、小京都の自然景観ならびに人為的な景観の様相を明らかにすることにより、小京都の魅力を解明する糸口を探るものである。

## 2. 小京都の条件

小京都としての条件は明確ではないが、全国京都会議の加盟基準の第一には、『京都に似た自然景観、町並み、佇まいがあること』と規定されている。しかしながら、この自然景観と町並み・佇まいに関する定義は用意されていない。そこで、歴史学者の村井康彦が唱えた小京都の条件<sup>1)</sup>をみると次の通りである。

\*キーワード：観光・余暇・景観、小京都  
\*\*正会員、工博、福井工業大学建設工学科（福井市学園3-6-1 TEL.0776-22-8111 FAX.0776-29-7891）

- ①京都との自然景観が類似すること、すなわち、周囲の山や丘陵は京都の東山、西山あるいは北山に擬せられ、市内を鴨川のような川が流れる。
- ②碁盤目状の町並み、古い民家や寺町通りによって、それらが醸し出すしっとりとした雰囲気がある。つまり、人為的景観における京都との類似性がある。
- ③古都京都と同様、歴史が生み育てた古い伝統、風俗や産業などが保持されている。

このうち、③の項目は小京都を演出するソフト的な要素であることから、本稿では対象外とする。したがって、自然景観とは三方、あるいは四方を山や丘陵で囲まれ、市内を川が流れていることであり、人為的景観とは碁盤目状あるいは短冊型の町割りが形成されており、歴史に根差した史跡や往時の面影を止める町並みがあることとするのが妥当と考えられよう。

## 3. 調査の概要

全国京都会議の発足に参加した25都市を対象として、その自治体職員に対する調査の分析結果から、小京都らしさを有している都市の上位には秋田県角館町、高山市、大野市および山口市が占めた<sup>2)</sup>。これら4都市における小京都としての自然景観と人為的景観の条件は、表-1に示すように前章の条件に

表-1 各都市の自然・人為的景観の現況

	周囲の山	町中の川	町割り	古い町並み・寺町
角 館	三方	桧木内川	短冊型	有り
高 山	四方	宮川	碁盤目状	有り
大 野	四方	無し	碁盤目状	有り
山 口	四方	一の坂川	その他	無し

概ね合致している。この中から、戦国大名の金森長近が築造したとされている高山と大野の両都市に着目して調査・研究を行った。

調査は観光客を対象とした現地でのアンケート調査と、市民を対象としたアンケート調査の2種類である。この内、観光客<sup>1)</sup>を対象とした調査は、高山では伝統的建造物群保存地区である三町、大野では市の中心部の朝市が開かれる七間通り<sup>2)</sup>において実施した。一方、住民を対象とした調査は、アンケート用紙3票入り封筒を両都市とも500戸ずつ無作為に配布し、回収は郵送による方法とした。調査は高山が1999年9月、大野は1998年10月に実施し、その概要は表-2に示す。また、各調査の設問項目は表-3に示す。

#### 4. 小京都らしさとその魅力の分析

##### (1) 高山と大野の小京都らしさの比較

観光客と市民それぞれが高山と大野に感じている小京都らしさの程度の把握を行った。その結果、観光客からみた各都市の小京都らしさは、「非常に持っている」と「まあまあ持っている」を加えると、高山では85%、大野では77%と高い割合であることから、観光客はそれぞれの都市に対して概ね小京都らしさを感じていることがわかる。また、高山では

表-2 観光客および市民調査の概要

都市 調査種類	高山	大野
観光客対象	有効サンプル数 250票	有効サンプル数 241票
市民対象	配布数 500通 回収数 140通 回収率 28.0% 有効票数 281票	配布数 500通 回収数 80通 回収率 16.0% 有効票数 162票

表-3 調査の設問項目と内容

	設問項目	設問内容
観光客対象調査	個人属性 小京都らしさについて	性別、年齢、居住地 景観構成要素の選択 (7項目から3項目を順位選択)
	小京都らしさの評価 町並みの魅力要因	5段階評価 10項目から3項目選択
住民対象調査	個人属性 小京都らしさについて	性別、年齢 景観構成要素の選択 (7項目から3項目を順位選択)
	小京都らしさの評価 町並みの魅力要因 景観整備事業の実施 景観整備後の評価 今後の景観整備について	5段階評価 10項目から3項目を順位選択 実施についての認識 5段階評価と「わからない」 整備方法の4段階選択

「非常に持っている」が32%と大野の13%を大きく上回っており、さらに、大野では「あまり持っていない」と「全く持っていない」を加えると1割を超えていることから、高山を訪問した観光客の方が大野に比べて小京都らしさを強く感じていることがわかる(図-1参照)。

一方、市民からみた小京都らしさは、「非常に持っている」と「まあまあ持っている」を加えると、高山では83%で観光客の割合とほぼ同値であるが、大野では60%と低く観光客の感じ方と差があることがわかった。さらに、大野では「あまり持っていない」と「全く持っていない」を加えると36%で3分の1を超えている(図-2参照)。

以上のことから、両都市の小京都らしさは、大野に比べて高山が高くなっている。また、観光客と市民の小京都らしさに対する意識を比較すると、高山ではほぼ同じであるが、大野では観光客に比べて市民の意識は低い。

##### (2) 小京都らしさを構成する景観構成要素

小京都らしさを演出する景観要素を明らかにするため、周囲の「山」、市中を流れる「川」などの6

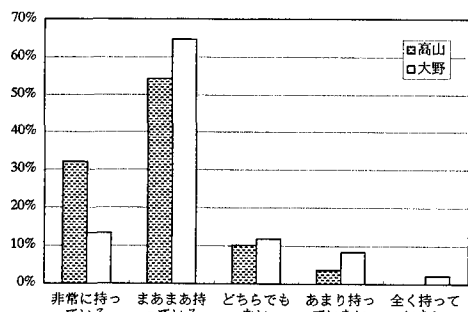


図-1 観光客からみた小京都らしさの都市別比較

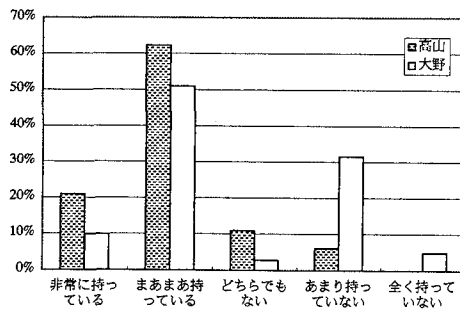


図-2 市民からみた小京都らしさの都市別比較

項目の景観構成要素に対し第1位から3位までの順位付けによる回答を求めた。集計は順位に従って各選択数に5、3、1倍のウエイト付けを行い、景観構成要素別の合計値を都市別の構成率で示した。その結果、観光客の回答は高山では「町並み」が45%と他を引き離して高く、続いて「川」が20%を占めている。大野では「町並み」が高いものの上位4要素の割合は15%から27%の間であり、極端な違いはみられない(図-3参照)。

一方、市民からみた順位では両都市ともに「町並み」が高く、「文化財」がそれに続いている。また、「川」では両都市の違いが大きくなっている(図-4参照)。

### (3) 自然に関する景観構成要素

前項の景観構成要素のうち、自然に関する「山」と「川」に着目すると、観光客と市民の双方とも山は大野が高率で、川は高山が高い率になっている。そこで、この原因を明らかにするため、周囲を囲む山に対する視覚情報として、市の中心部から四方の山々に対する仰角を測定したところ、表-4のような結果を得た。これによると、高山では南の方角に

表-4 市街地から周囲の山に対する仰角

	東	西	南	北
高山	5° 10'	3° 40'	12° 10'	2° 20'
大野	4° 20'	9° 50'	6° 40'	4° 40'

対する仰角が大きいものの、全体として大野の方が山に囲まれている感覚が強いことから、高山の山に対する割合が高くなっていると思われる。したがって、視覚としての仰角が景観構成要素の山に対する比率に影響することが傍証できよう。

一方、市中を流れる川については、高山では市街地中心部に宮川が流れ、その河川敷は親水空間として整備がなされている。これとは逆に、大野では城下町であった旧市街地において、伏流水による湧水を利用した文化遺産である「御清水」や水路があるものの河川は無く、河川を修景した親水空間は市街地の周辺部に位置していることから、川に対しては高山が高くなっていると思われる。

### (4) 魅力的な町並みの形成と保全

前々項においては観光客、市民の双方とも町並みに対して小京都らしさを強く感じていることから、この町並みの魅力に関する集計結果を分析した。

観光客からみた町並みの魅力は、高山では「建築物が和風」が28%と高率で、2位の「建築物外壁の色や素材」の17%に差をつけている。大野では「建築物が和風」と「屋敷林の多さ」が約2割と高く、他の項目を引き離している。また、両都市とも「生け垣や板塀」「建築物の高さの制限」および「屋根の形や素材」が10%前後であることから、観光客はこれらの項目に魅力を感じていることがわかる。また、「広告や看板の制限」や「電線類の地中化」では高山が大野を上回っている(図-5参照)。

一方、市民からみた魅力的な町並み保全の施策に対する集計結果では、両都市とも「建築物を和風に統一」が25%前後と高く、他の項目に差をつけている。また、2番目以下では「屋根の形などの統一」と「建築物のセットバック」を除くその他の項目では、極端な差は見られなかった(図-6参照)。

これらの結果から、町並みを魅力的なものにするためには、建築物を和風に統一、建築物の外壁の色や素材を統一および建築物の高さの制限といった建

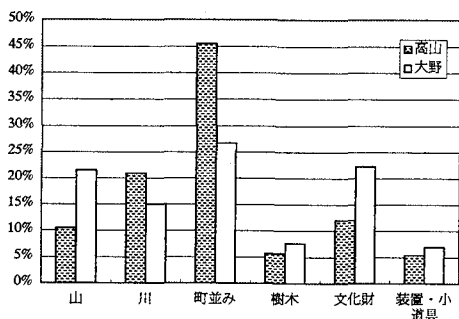


図-3 観光客が感じている小京都らしさの構成要素

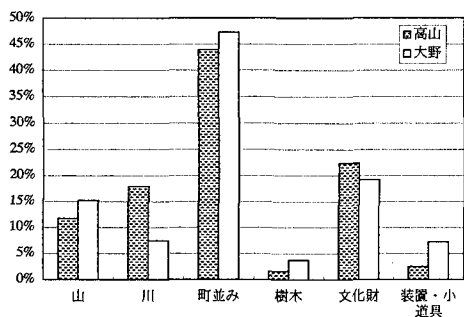


図-4 市民が感じている小京都らしさの構成要素

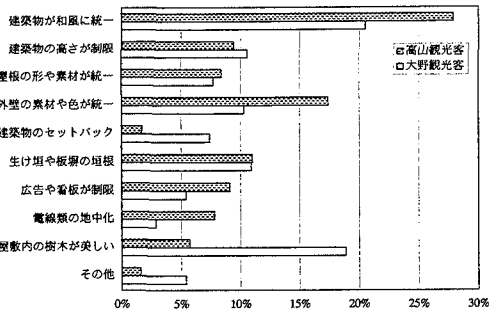


図-5 町並みの魅力に対する観光客の意識

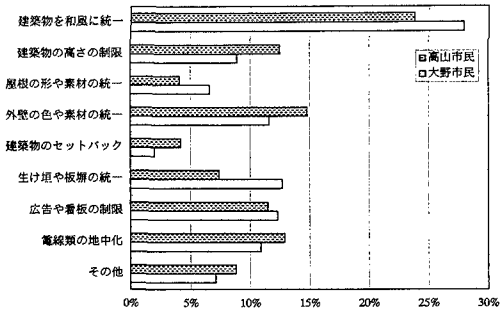


図-6 魅力的な町並み形成方策に対する市民の意識

建築物そのものに対する制限・規制を中心に行うことが必要と考えられる。

### 5. 景観保全施策と景観形成事業

高山と大野において制定されている自然景観および市街地景観に関する保全施策と、景観整備事業の実施状況、さらには景観表彰制度の有無について、行政担当課に対するヒアリングを通して整理したものが表-5である。高山では自然および市街地景観の保全施策、景観整備事業並びに景観表彰制度の全てに対して網羅されているが、大野では自然景観の保全地区が指定されておらず、市街地景観についても条例はあるものの地区指定がなされていない。

小京都を演出するものは、山や川の自然と町並みであることから、高山では自然景観および市街地景観の保全施策が指定されていること、とくに伝統的建造物群保存地区の指定がなされていることが、より小京都としての高い評価に反映していると考えられよう。

### 6. まとめ

表-5 景観保全施策と景観整備事業の都市別比較

	高山	大野
自然景観	・緑地保全地区 ・風致地区	無指定
市街地景観	・伝統的建造物群保存地区(3.5ha) ・市街地景観保存条例(27.2ha)	・大野市都市景観条例(地区未指定)
景観整備事業	・歴史的地区環境整備街路事業 ・まちかど整備事業 ・宮川河川環境整備事業	・越前大野歴史の路整備事業 ・御清水、御清水会館の整備
景観表彰制度	・景観デザイン賞	・大野市景観賞

本研究では、歴史都市である高山市と大野市を対象として、観光客および市民の小京都らしさの意識とその魅力について比較・分析を行った。これらから、次の結果を得ることができた。

- ①小京都らしさは観光客、市民双方とも大野に比べて高山の小京都らしさが勝っている。また、高山では観光客と市民の意識はほぼ同じであるのに対し、大野では観光客に比べて市民の意識は低い。
  - ②小京都らしさを構成している景観構成要素は、両都市とも町並みが高い評価を受けている。また、観光客と市民との差はあまり見られなかった。
  - ③自然景観構成要素の主なものである周囲の山については、その仰角の高低が景観構成要素としての山の評価に影響を与えている。
  - ④町並みを魅力あるものにするためには、建築物を和風に統一することや、外壁の色や素材の統一および高さの制限が主な方策である。
  - ⑤小京都を演出するものは自然と町並みであることから、結果として自然および市街地景観の保全施策の有無が、小京都としての評価を左右している。
- 今後の課題としては、自然景観構成要素である山と川以外の自然要素も考慮に入れながら、より多くの歴史都市に対して調査を行うことが必要である。

[補注]

(1) 現地でのアンケート調査の被験者は、観光客が大半を占めていたが、地元住民の方も若干あったことから、集計には住民分を除いて行った。

[参考文献]

- 1) 「日本地名大百科(ランドジャポニカ)」小学館発行
- 2) 和田章仁・材野博司;小京都における景観保全と景観意識,土木計画学研究・講演集21(2),pp.165-168,1998
- 3) 和田章仁・材野博司;小京都の魅力要素に着目した景観形成に関する考察,土木計画学研究・講演集22(2),pp.663-666,1999